

平成22年12月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520393

研究課題名（和文）語彙的統語範疇決定のメカニズムを探る：日・英語比較研究

研究課題名（英文）In Search of the Origins of the Lexical Syntactic Categories:
a Comparative Study of Japanese and English

研究代表者

高橋 眞理 (TAKAHASHI MARI)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：20247779

研究成果の概要（和文）：統語構造(LF)は単一の生成機構によって生成され、それと準同形の構造が合成的に解釈される。各語彙項目は(1)予測できない音韻情報、(2)予測できない意味情報、(3)統語構造との対応関係の指定（動詞/名詞/形容詞など）、の束であり、LFと意味構造の対応により、動詞は出来事/状態とその参加者/物の述語、名詞（の語根）は「ある種のもの」の固有名と解釈される。3種類の語彙範疇が存在する理由は、ひとが、出来事、もの、ものの属性、に注目して世界を認識する生得的特性を持つからであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Syntactic structure, or LF, is generated by a single generative system and a structure homomorphic to it is interpreted compositionally by semantics. Each vocabulary item(VI) is a bundle of (1) unpredictable phonological information, (2) unpredictable semantic (encyclopedic) information, and specifications for its association with complex syntactic structures. The labels for open-class VIs, verb(V)/noun(N)/adjective(A), can be considered to be a diacritic for this “environment of insertion.” Because of the homomorphism between the LF and its interpretation, a verb is interpreted to be a predicate of an eventuality with a specification of its participants and a noun (root) is interpreted to be the name of a kind of entity. The existence of three lexical categories, V/N/A, may very well originate from the innate human conceptual propensity to focus on and identify eventualities/entities/and properties of entities in perceiving the world.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：動詞、名詞、日本語、英語、語彙的統語範疇、形態素、意味解釈、音形

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論は、動詞(verb, V)/名詞(noun, N)/形容詞(adjective, A)という「伝統文法」の「品詞」名を踏襲し、範疇記号 V(P)/N(P)/A(P)を一貫して使ってきた。しかし2000年代に入るまで、「V/N/A 3つの語彙的統語範疇は本質的にどう違うのか、どのように定義されるべきなのか」という問題が統語論研究者によって活発に議論されることはなかった。生成文法理論を紹介する教科書的な著作：Andrew Radford(1988, 1997, *etc.*)は、「語彙の統語範疇は、その意味、統語構造内での分布、そして形態音韻的特性、の3側面を総合して分類すべきものである」としている。しかし、この3つの基準にずれがあった場合はどれを優先すべきなのか。例えば日本語には、「ふつうの動詞(regular verb, RV)」：調べ、集め、始め、*etc.* 以外に、Samuel Martin(1975)以来 verbal noun(VN)と呼ばれてきた語彙：調査、収集、スタート、*etc.* が存在する。VNはその意味も統語的分布も RV のそれと同じであるが、自由形態素であるという点で、拘束形態素である RV とは異なり、名詞と似た形態音韻的特質を持つ (M. Takahashi (2000))。「日本語の調査や収集は、英語の *investigate* や *collect* と同様、動詞である」と言うことができるのか。このような状況下、2003年に、この問題に真っ向から取り組んだ著書、Mark Baker の *Lexical Categories: Verbs, Nouns, and Adjectives* 出版された。

Baker(2003)は、1990年代までは生成文法の主流であった「語彙論者」的立場での研究である。しかし1990年代後半から2000年代はまた、語彙論者の立場から脱却し、「文の生成機構は統語部門一つだけである」という仮説(single-engine hypothesis)に基づいて文法全体の構造、各部門間の関係をその根本から見直そうとする試みが大きな潮流となり始めた時期であった。その中で特に注目すべきなのは、Hagit Borer(2005) *Structuring Sense: Vols. I & II*、さらに Morris Halle and Alec Marantz(1993)以来進化を続けてきた Distributed Morphology(DM)の枠組みを採用した諸論文(Mara Arad(2005) *Roots and Patterns, etc.*)、そして、それまで独立して研究されることが多かった語彙の意味構造を、統語構造とより直接的に関連づけようとする試み(Angelika Kratzer(2000~2003) *The Event Argument*, Liina Pykkänen (2002) *Introducing Arguments, etc.*)である。これらは大きな意味で生成文法の Principles and Parameters 理論の枠組み内で行われた研究であるにもかかわらず、語彙項目(listed item, LI)はどのような情報を持って語彙目録に記載されているのか、V/N/Aの区別は

どのように決定されるのかについて全く異なった主張/表現をしている：

- (1) Baker(2003)
V：指定部(主語)をライセンスする LI
N：指示指標を与えられる LI
A：VでもNでもない LI
- (2) Borer(2005)
LIはどのような「文法的」特質も持たず、V/N/Aの区別はそれが挿入される統語環境によって決定される。
- (3) Arad(2005)
V/N/Aはそれぞれ、範疇の区別を持たない語根(root, v)と機能的な主要部である $v/n/a$ が結合したものである。

普遍文法理論の根幹にかかわる問題について、このように明確に異なった主張がされていること、日本語と英語の語彙体系には共通点も多いが興味深い差異も見られること、そして上記の諸研究が日本語にほとんど触れていないことから、語彙的統語範疇の決定メカニズムに焦点をあてた日・英語比較研究をスタートさせる絶好の時期であると考えた。

2. 研究の目的

(1) 理論の分岐点となる次の各項目に関して、文法の各部門の働きの重複が最も少なく、かつ日本語と英語の特質を同時に捉えられる選択をすること：

- ① 文法全体の構成
 - ② 統語部門と意味部門のインターフェース
 - ③ 統語(LF)構造
 - ④ 何が、どのような情報を持ってリストされているか
 - ⑤ 語彙挿入のタイミング
- (2) (1)の結論に基づき、普遍文法におけるV/N/Aの違いを定義すること。
- (3) (1)と(2)の結論に基づき、日本語の語彙的統語範疇の下位分類を行うこと。
- (4) V/N/A という3種類の語彙的統語範疇が存在する理由を考察すること。

3. 研究の方法

- (1) 2. (1)~(3)のため、V/N/Aの定義に関連する統語・形態論と意味論の研究を詳細に検討し、その予測が日本語の特性を説明できるかどうかを検証する。
- (2) 2. (4)の手がかりを探るため、日本語を習得しつつある幼児の初期の自然発話記録(野地潤家(1973~1977)『幼児期の言語生活の実態』*etc.*)を調査し、語彙的統語範疇の使用についての誤用パターンを分析する。

4. 研究成果

3. の作業の結果、2. の各項目について以下の結論を得た。

(1) ①各部門間の重複がない文法モデルを構築するため、研究プログラムとして single-engine hypothesis を採用する。

② 統語部門と意味部門のインターフェースは LF 一ヶ所のみであり、LF またはそれと準同形の構造が、合成的に意味解釈を受けると仮定する。

③ VP の統語(LF)構造の骨格に関しては、Gillian Ramchand(2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax* の提案を採用する。すなわち、例えば“Su cut the cake (in half)”のような文の中核にある VP は図1の構造を持ち、“Su が原因で、the cake に変化が起こった(その結果 the cake は in half という状態になった)”という意味解釈を与えられる。VP を構成する各主要部 *init*, *proc*, *res* の意味解釈は図2のとおりである(“e”は subevent の変項を、“→”は因果関係を表す)。

図1 $[_{initP} \text{Su } \textit{init} [_{procP} \text{the cake } \textit{proc} [_{resP} \text{the cake } \textit{res} \text{in half}]]]]$

図2 $[[\textit{init}] = \lambda P \lambda x \lambda e \exists e_1, e_2 [P(e_2) \& \textit{init}'(e_1) \& \textit{State}(e_1) \& e = (e_1 \rightarrow e_2) \& \textit{Subject}(x, e_1)]]$

$[[\textit{proc}] = \lambda P \lambda x \lambda e \exists e_1, e_2 [P(e_2) \& \textit{proc}'(e_1) \& \textit{Process}(e_1) \& e = (e_1 \rightarrow e_2) \& \textit{Subject}(x, e_1)]]$

$[[\textit{res}] = \lambda P \lambda x \lambda e [P(e) \& \textit{res}'(e) \& \textit{State}(e) \& \textit{Subject}(x, e)]]$

また、普通名詞を中核に持つ NP の統語(LF)構造の骨格に関しては、Kratzer(2007) “On the Plurality of Verbs”の提案を採用する。例えば“zebra”は図3のいずれかの構造を持つ。“zebra”の語根はシマウマという種全体を指す kind の固有名であり、これに結合される classifier の種類によって、「シマウマの個体」または「シマウマの種類」と解釈される。

図3 $[[\textit{CL}_{ind} [\sqrt{\text{zebra}}]] / [[\textit{CL}_{kind} [\sqrt{\text{zebra}}]]]$

図4 $[[\textit{CL}_{ind}] = \lambda x \lambda y [kind(x) \& individual(y) \& y \leq x]]$

$[[\textit{CL}_{kind}] = \lambda x \lambda y [kind(x) \& kind(y) \& y \leq x]]$

④&⑤ 何が、どのような情報を持ってリストされているか、そして語彙挿入のタイミングについても、Ramchand(2008)説を採用する。すなわち、(開放類の)語彙項目(LI)は(i)予測できない音韻的情報(音形の基底構造)、(ii)予測できない意味情報(encyclopedic information)、そして(iii)挿入される統語構造の指定の束として一か所にリストされている。この3つのうち最後の情報こそ、語彙的統語範疇の定義である。V/N/A は「語彙挿入環境を指定する記号」と考えてよい。例えば英語で[kʌt]という音形を持つ語彙は、“V”の指定を持つために図1のような統語構造と関連づけられる。これにより、

init-proc-res が[kʌt]と発音され、構造によって決定される意味(いわゆる項構造や語彙的アスペクト特性)に、「もともと結合していたものを大きな切片に分離させる、通常ナイフなどの道具を使う」など、構造からは予測できない意味をつけ加えられて解釈されることになる。Ramchand(2008)はこのように「語彙挿入が統語構造の末端ではなく複雑な統語構造を target として起こる」と仮定することで、語彙から「予測可能な意味情報」を取り除くことに成功している。Arad(2005)など、DM の諸研究と Ramchand(2008)には類似点も多いが、前者が提案する機能範疇 v/n/a には経験的に検証できる内容がない。Borer(2005)は最も重複の少ない理論だと言えるが、どの言語でも語彙挿入が自由に起こり“coercion”が観察されることを予測し、日本語がこの性質を持たないことを説明できない。

(i) He chaired the meeting.

The detective dogged the suspect's footsteps.

(ii) *彼はその会議を椅子した。

*その探偵は容疑者の足取りを犬した。

(2) 普遍文法における V の定義は、「その指定を持つ語彙を 4. (1) ③図1の構造に対応させる指示」である。この構造は合成的意味解釈を受けるため、V を持つ語彙は、出来事や状態(eventuality, 広い意味での event)の property を、それに参加する者/物/事と共に表すことになる。

普遍文法における N の定義は、「4. (1) ③図3の中心部、または句全体と対応させる指示」である。N (の語根) は、「ある種のもの(kind)」の固有名と解釈されることになる。

A に対応する統語構造を特定することはできなかった。あるいは Baker(2003)の主張するように「指定を持たないのが A の定義である」というのが正しいのかもしれない。今後の研究課題とする。ただ、A の中核部の意味解釈は「kind/individual/stage/[property に対応する individual]/event など、すべての種類の entity の property」であると考えられる。A も V も“property of state”を表す構造に挿入可能であることが、A/V どちらとして語彙化されるかに関しては同一言語内にも言語間にも予測できないゆれが存在することの原因かもしれない。

(i) the same(A) person

a different(A) person

同じ(A)人、違う(V)人

(ii) 雲がある(V)、雲がない(A)

(3) 4. (1) ④&⑤より、日本語のいわゆる VN は、RV と同様、動詞であると結論づけられる。

(4) 日本語を習得しつつある幼児の初期の自然発話記録の調査からは語彙的統語範疇の誤用は特定できなかった。この作業を具

体的な提案に結びつけることはできなかったが、ある音形と統語構造とを対応させることに関して幼児が「非常に保守的」であることは興味深い。Baker(2003)も述べているように、ひとは出来事/状態、もの、ものの属性、に注目して世界を認識する生得的能力を持ち、母語習得の初期においては、「何かの変化＝動詞、(名前をつけられるような)もの＝名詞、異なった時空を占拠するものに共通して認められる属性＝形容詞」というような「ガイドライン」に従って初期の語彙を範疇化しているのかもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

“日本語の「自由動詞」名詞句について”
(仮題)執筆中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 眞理 (TAKAHASHI MARI)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：20247779